

理想の英語教師に必要な資質・能力

——英語専攻の日本人大学生を対象とした実証研究——

藤 田 賢

Abstract

This study investigated the ideal English teachers' competencies and abilities for English-major Japanese university students. One hundred seven students participated in this study. They answered three kinds of questionnaires: 1) competencies and abilities required for teachers in general, 2) competencies and abilities necessary for English teachers, and 3) open-ended questions about good English teachers and not-so-good ones. The results showed that competencies and abilities for teachers in general were composed of "practical skills," "aspiration and humanity," and "sociability and mission," while English teachers needed "counseling mind," "global mind," "English language teaching skills" and "strict direction," of which the last one was not highly evaluated by the participants, though. It was found that the "strict direction" was related to "sociability and mission" of English teachers. The free descriptions of good teachers and not-so-good ones revealed that the former are those who can give English classes easy to understand under positive atmospheres, and the latter tend to teach without confirming students' understanding, which gave the impression of irritable teachers to them. It was suggested that future study should include the larger and more diverse population.

キーワード：理想の英語教師，英語専攻学生，資質・能力，アンケート調査，自由記述

Key words : ideal English teachers, English-major students, competencies and abilities, questionnaires, free descriptions

はじめに

グローバル化の進展，情報通信技術の発達，知識基盤社会の到来など，社会の在り方が劇的に変化しつつある。人工知能（AI）やモノのインターネット（IoT）が急速に進み，超スマート社会を迎えている。それはまた，新型コロナウイルス感染症など先行きが不透明な「予測困難な時代」でもある。このような社会的変化の中であって，教師に求められる資質能力，学習者が描く理想の英語教師像を改めて検証し，英語教師の授業改善や大学での英語教員養成に活用していく必要性が

高まっている。

本稿では，英語専攻の日本人大学生を対象に，教師に求められる資質能力を整理し，理想の英語教師像の実態を明らかにすることを目的とする。具体的には，アンケート調査によって，教師に求められる資質能力と理想の英語教師像の関係について実証的に検証していく。同時に，アンケートの自由記述の分析から，「よい教師」とそうでない教師の特徴を可視化することによって，理想の英語教師像を明らかにしていく。このことによって，今後の英語授業の改善や大学での英語教員養成への示唆が得られることが期待できる。

1. 教師に求められる資質・能力

社会で求められている教師の資質・能力について、まず、近年の文部科学省の提言や中教審答申などを参考に振り返っておく。次に、教師の資質・能力に関する先行研究をいくつか概観した上で、本研究の課題を提示する。

1.1 社会の変化と教師の資質・能力

文部科学省は、これからの社会において求められる教師の資質・能力の育成について、様々な提言や制度改革を重ねてきている。ここでは、2000年前後から現在までの大きな流れについて、主なものに絞って見ていく。

中央教育審議会(2006)では、1997年の教育職員養成審議会の第1次答申を踏襲して、教師に求められる資質・能力を、(1)いつの時代にも求められる資質能力(教育者としての使命感、人間の成長・発達についての深い理解、教育的愛情、教科等の専門知識、広い教養、実践的指導力)、(2)今後特に求められる資質能力(地球的視野に立って行動するための資質能力、変化の時代を生きる資質能力、教員の職務から必然的に求められる資質能力)、(3)得意分野を持つ個性豊かな教員(得意分野づくり、個性の伸長)などに整理した。その後、中央教育審議会(2012)では、教職生活全体を通じて学び続けることができる教師像を強調した。さらに、中央教育審議会(2015)では、(1)時代の変化やキャリアステージに応じて生涯にわたって資質能力を高めていくこと、(2)アクティブ・ラーニングの視点からの授業改革やICTの活用など新たな課題に対応できる力量を高めること、(3)チーム学校の一員として組織的・協働的に課題の解決に取り組む力に言及しており、後のGIGAスクール構想や「令和の学びのスタンダード」への橋渡しが進んでいった。

文部科学省は、2019年12月に「GIGAスクール構想の実現パッケージ」(文部科学省、2019)、いわゆるGIGAスクール構想を発表した。そして、新学習指導要領が2020年度から小学校で、2021年度には中学校で全面実施され、2022年度には高等学校でも1年次から順次実施されてきて

いる。中央教育審議会(2021)は、2021年1月に『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申)を発表した。答申の基本的な考え方では、超スマート社会、「Society5.0時代」の到来と新型コロナウイルス感染症など「予測困難な時代」にあって、新学習指導要領の着実な実施とGIGAスクール構想の実現によって、「一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが必要(中教審、2021)」であるという。この答申では、教師に求められる資質・能力として、社会の変化を前向きに受け止め、求められる知識・技能を意識し、継続的に新しい知識・技能を学び続けること、情報活用能力、データリテラシーを高めること、地域と連携した魅力的な教育活動を行うことなどが提言されている。

1.2 教師の資質・能力に関する先行研究

このような2000年代における文部科学省を中心とした教師の資質・能力に関する提言を実証的に検証する試みが多数行われてきている。ここでは、教職課程の質保障やカリキュラム改革による教員養成の充実を目的とした研究(山根ら、2010;小柴ら、2014;二宮ら、2018など)を概観しておく。

山根ら(2010)では、岡山県・岡山市が教員採用のために掲げている「求める教師像」の項目、岡山大学教育学部のコア・カリキュラムの目標(学習指導力、生徒指導力、コーディネート力、マネジメント力)から20項目の理想の教師としての資質・能力を記述し、それぞれの項目について5件法で回答するアンケート調査を実施したことが報告されている。アンケートは、岡山大学教育学部に在籍している3回生の学生を対象に、344名から回答を得たという。その結果、学生が在籍する学校種(幼稚園、特別支援、中学校、高等学校)にかかわらず、「子どもとのコミュニケ

ーションを上手にとることができる先生」「子どもの日々の変化に気づくことができる先生」「子どもの人格を尊重する先生」など子どもとの関係性にかかわる項目が上位に位置づけられたことが明らかになった。それに対して、「分かりやすい授業をする先生」は、中高の教員を目指す学生の得点は高かったが、幼稚園や特別支援学校を目指す学生の得点はそれほど高くはなかったことが指摘された。以上の結果から、学校種にかかわらず大切な教師としての資質・能力と学校種に固有の資質・能力の両面があることが示唆された。

小柴ら（2014）は、山根ら（2010）で調査された20項目の理想の教師としての資質・能力を現役の中学生、高校生の立場から検証し直している。アンケート調査は、中学生、高校生（A県の公立中学生、高校1, 2, 3年生）を対象に大規模に実施され、合計2,161名から回答を得た。中学生、高校生の全体では、「わかりやすい授業をする先生」「生徒とのコミュニケーションを上手にとることができる先生」「クラスをまとめることができる先生」「だれに対しても笑顔で明るくかかわる先生」の4項目が共通の上位項目となったという。中学生と高校生の違いとしては、中学生では、「授業に全力で取り組む先生」が、高校生では「生徒の成長に喜びを感じる先生」が5位となったと述べられている。さらに、20項目に対して、探索的因子分析を行い、最尤法によるプロマックス回転によって、3因子を抽出した。具体的には、意欲、積極性、礼儀正しさなどに関連した項目を「教育的態度」、生徒とのコミュニケーション、クラスをまとめられる、わかりやすい授業などの項目を「教育技術」、生徒の成長に喜びを感じる、笑顔で明るくかかわるなどの項目を「教育指導」と命名したことが報告されている。以上の結果から、中学生、高校生は、理想の教師が必要とする資質・能力を、(1)教育に対する真摯な態度、(2)しっかりとした教育技術、(3)生徒への暖かい支援や指導などの観点から把握していることが明らかになった。

二宮ら（2018）では、教員希望の学生とそうでない学生の間で人数を統制した100名の参加者を

対象として、印象に残る教師像についてのインタビュー調査を行った結果を報告しており、学生が求める理想の教師の資質・能力について検証している。その結果、理想とする教師の資質・能力として、親しみやすいこと、熱意があること、楽しくおもしろいこと、授業がうまくて内容がわかりやすいこと、学校の勉強以外のことも教えてくれること、優しさと厳しさのめりはりがあること、寄り添ってくれて親身になってくれること、差別なく平等に生徒に接すること、子どもの目線に立って接してくれること、などの特徴が浮かび上がってきたという。これに対して、嫌いなタイプの教師像から得られた好ましくない資質・能力としては、決めつけや押し付けがましい指導をすること、友好的でないこと、平等に生徒に接しないこと、生徒に関心がなさそうなこと、感情的に怒ったりすること、授業がうまくないこと、先生としての威厳がないこと、などの意見があったと報告している。

以上の実証研究から、理想の教師に求められる資質・能力には、いくつかの共通点が認められる。つまり、教育への情熱や真摯な態度があること、子どもたちとのコミュニケーションや対人関係が良好であること、分かりやすく楽しい授業を実施できることなどが、様々な実証研究で明らかにされてきた教師に求められる資質・能力であると思われる。また、学校種や調査対象者の発達段階によって、教師に求められる資質・能力には、異なる面がある可能性も示唆されてきている。

1.3 理想の英語教師に求められる資質・能力

それでは、理想の英語教師に求められる資質・能力の実証研究では、どのようなことが明らかになってきているのであろうか。学校種や調査対象者の英語習熟度等によって、理想の英語教師に求められる資質・能力には違いがあるのだろうか。ここでは、調査対象者の違いを考慮に入れながら、いくつかの典型的な先行研究を見ていく。調査対象は、進学校の高校生（保坂，2004a, 2004b）、私立大学の英語が苦手な学生（牧野，2015）、英語専攻の大学生（予備研究として、藤田，2022）を

取り上げておく。

保坂 (2004a) は、進学校の高校生1年生から3年生までを調査対象として、アンケート調査を実施し、296名の回答結果をまとめている。予備研究として理想の英語教師像についての自由記述による調査を実施した後、73項目の資質・能力を5件法で問うアンケートを作成した。アンケートの有効回答を主因子法、バリマックス回転による因子分析にかけ、6つの因子を抽出したという。その結果、第1因子は「受験学力のつく質の高い授業をする」、第2因子は「知識・教養が豊かである」、第3因子は「生徒の立場に立った授業をする」、第4因子は「カウンセリング・マインドを持って生徒に接する」、第5因子は「厳しい指導で英語力をつける」、第6因子は「英語の高い運用能力を持つ」と名付けられた。進学校の高校生を対象としたこの研究では、第1因子や第5因子のように、受験学力を伸ばすことや、そのための厳しい指導をすることが、理想の英語教師像として浮かび上がってきたのが特徴であった。しかし同時に、カウンセリング・マインドを持って接することも理想の教師の資質・能力として抽出されていた。参加者の学年、性別、英語の好き嫌いなどの個人差による違いも分析されており、たとえば、男子生徒で英語の好きな生徒が受験学力のつく質の高い授業を求めており、3年生が厳しい指導で英語力をつける授業を求め、英語が好きな生徒や3年生の英語の学力が高い生徒が先生の高い英語運用能力を望んでいることが判明したと報告されている。続いて、保坂 (2004b) では、保坂 (2004a) の6因子を、「対生徒対応」(教室経営にかかわる集団維持機能)と「目的達成志向」(科目の知識・技能にかかわる指導)の2つの潜在因子モデルで説明している。さらに、保坂 (2004a) の2年生167名を学年末試験で上位群57名、下位群52名に分けて潜在因子を探った。上位群では、「対生徒配慮・受験志向」と「コミュニケーション志向」の2潜在因子モデルの適合度がよく、生徒たちは、受験学力をつけてくれて、コミュニケーション能力を伸ばしてくれる教師を求めていることが明らかになった。他方で、下位

群の生徒では、「学力向上・生徒配慮」の1潜在因子のみのモデルが採用され、生徒を支援しながら基礎学力をつけてくれる教師を求めていることが報告された。以上のように、進学校の高校生が全体として理想の英語教師に求める資質・能力と、学年や英語習熟度によって異なる理想の英語教師に必要な資質・能力が明らかにされた。

牧野 (2015) では、英語が苦手な再履修となった私立大学の非英語専攻の1,2年生95名を対象として、アンケート調査によって、理想の英語教師に求められる資質・能力を明らかにしている。アンケートは、自由記述による事前調査から28項目の質問に集約したものを、5件法で回答する形式で作成された。そして、評価の数値が4.00以上を示した項目を理想の英語教師に求められる資質・能力として検証した。その結果、これらの資質は、(1)授業の進め方(楽しい授業をする、学生が理解できるペースで授業を進める、わかりやすい授業をする、学生の英語のレベルにあった授業をする、基礎から教えるなど)、(2)教師としての人間的な特徴(親しみやすい、面白い、優しい、陽気など)、(3)学生への対応(やる気を引き出してくれる、頑張りを見てくれるなど)の3つに分類できたことが報告されている。英語が苦手な学生の理想の英語教師像には、授業内容そのものに言及した項目がなく、学生は何を学ぶかということよりも、教師の指導方法、人間的特徴、学生への対応力を求めていることが明らかにされた。

藤田 (2022) では、これまであまり調査されてこなかった英語専攻の学生45名を対象として、保坂 (2004a) のアンケート項目を絞った上で、予備研究としての調査を行った。アンケート結果に基づき、3.50以上の評価を得た14項目に対して、主因子法、バリマックス回転を用いた因子分析を行い、3因子を抽出した。具体的には、第1因子は、「学習者配慮・基礎的な英語力」(学習者の気持ちやペースに配慮する、入試にも対応できる英語の基礎力を養成するなど)、第2因子は、「英語力と教養・楽しく学ぶ英会話」(英語運用能力や幅広い教養がある、ゲームや歌を取り入れて

英会話の授業をするなど）、第3因子は、「学習者に参加し交流・コミュニケーション重視」（受験に関係なくペアやグループワークによる授業を行う、友だちのように学習者と交流して授業に参加するなど）の3つの因子が抽出されたことが報告された。また、英語習熟度の上位クラスと下位クラスの学生別に、「よい教師」と「そうでない教師」についての自由記述の結果も併せて分析した。その結果、上位クラスでは、「よい教師」として、「いつもやる気にさせてくれるし、アクティビティを取り入れてくれ、楽しく単語や知識、英語の感覚を身につけることができる」「人間性が良く、英語を受験のためではなく、1つのコミュニケーションとして考えて教えている人」、「そうでない教師」としては、「問いに答えられない生徒に『何故分からないの?』というスタンスで、授業も英語が分かっている人向けの内容でスピードも速かった」「己の授業を貫く先生」などのコメントがあった。下位クラスでは、「よい教師」として、「良いところがあつたら褒めてくれ、困っていて手を挙げづらいのを感じ取って生徒に寄り添ってくれる」「英語以外のことにも学びを広げており、実用英語・受験英語をともに教えて、時に厳しく、時に優しくその子に合う勉強を個々に教えてくれる教師」、「そうでない」教師として、「『なんでできない?』『簡単だよ?』とプレッシャーを与え、できる人ばかり優遇する」などの記述があった。以上のように、英語習熟度にかかわらず、よく似た理想の英語教師に求められる資質・能力が明らかになった。しかしながら、今後の課題としては、(1)参加者の数を増やすこと、(2)アンケート項目を精査し調査の妥当性を高めること、(3)一般的に教師に求められる資質・能力と英語教師に求められるそれらとの関係を明らかにすることなどが挙げられた。

そこで、本研究では、英語専攻の大学生の参加者を増やし、アンケート項目を精査した上で、以下の研究課題を設定した。

研究課題1：英語専攻の大学生が教師に求める資質・能力、理想の英語教師像はどのようなものか。

研究課題2：教師一般に求められる資質・能力と理想の英語教師像の関係はどうなっているか。

研究課題3：自由記述から見た「よい英語教師」「よくない英語教師」はどのような特徴があるか。

2. 研究方法

2.1 参加者

本研究では、私立大学の英語系学科に在籍する大学2年生107名を対象に、2021年10月中旬にアンケート調査を実施した。調査に最も近い2021年12月現在のTOEIC (R & W) の成績は、平均で470.3点、標準偏差105.1、最高が780点、最低が225点であった。参加者は、小学校の高学年から9年半程度の学校における英語学習歴を持っていた。

2.2 調査の材料

調査の材料は、藤田（2022）で指摘されたように、調査項目を精査する必要があったため項目全体を再考した。また、教師一般に求められる資質・能力と理想の英語教師像の関係が検証できるように工夫した。具体的には、以下の3つの部分から成るアンケートを作成した。

(1) 教師一般に求められる資質・能力調査

山根ら（2010）で開発された教師に求められる資質・能力の20項目（G1-G20）をおおむねそのまま利用し、5件法で回答させた。Cronbach's $\alpha = .94$ であった。

(2) 理想の英語教師に求められる資質・能力調査

保坂（2004a）より6因子に収束した項目を各因子から5項目ずつ選択し、「留学経験」を「留学、海外研修などの経験」など一部の項目で文言を微修正した。また藤田（2022）で高評価だった項目を追加したり、学習指導要領に配慮して「授業は原則として英語で行う」などの項目も加えたりした。こうして、最終的には、35項目（Eng1-Eng35）のアンケート調査を作成し、5件法で回答させた。アンケートの信頼性は、Cronbach's $\alpha = .96$ であった。

(3) 自由記述による理想の英語教師像調査
「あなたが思ったり、出会ったりした、よい英語教師（よくない英語教師）について自由に書いてください」という自由記述の調査も同時に行った。

2.3 調査の手順と分析方法

上記の(1)から(3)の調査は、Google フォームによって、対象学生に配付された。2021年10月中旬の英語の授業において、授業内で回答させた。分析は、まず、教師一般に求められる資質・能力、理想の英語教師に求められる資質・能力の別に、各項目の記述統計量を算出した。次に、それぞれの調査別に因子分析を行い、探索的に因子の抽出を行った。その後、それぞれの因子について因子得点を算出し、2つの調査の因子間の相関分析を行い、それぞれの因子の相互作用を検証した。自由記述による理想の英語教師像調査については、ウェブ版のAIテキストマイニング（ユーザーローカル）及び分析ソフト KHCoder3（樋口

耕一氏）により解析を試みた。ワードクラウド、共起ネットワーク、KWIC コンコーダ分析を行い、結果の解釈および考察を行った。

3. 調査の結果

3.1 教師に求められる資質・能力調査の結果

教師一般に求められる資質・能力調査（G1-G20）、理想の英語教師に求められる資質・能力調査（Eng1-Eng35）の記述統計の結果は、以下の表1、表2の通りとなった。

教師一般に求められる資質・能力においては、すべての項目で3.50以上となり、英語専攻の大学生は、アンケートに記述された内容のすべてが大切であると判断していた。これに対して、理想の英語教師に求められる資質・能力においては、3.50未満の項目が3項目見られ、これらは、「宿題を出してくれる」「授業中必ず1回あててくれる」「厳しく指導する」という内容であることが判明した。

表1 教師一般に求められる資質・能力調査の結果

番号	項目内容	M	SD
G1	わかりやすい授業をする先生	4.75	0.67
G2	他の先生と協力することができる先生	4.14	0.95
G3	子どもとのコミュニケーションを上手にとることができる先生	4.60	0.67
G4	クラスをまとめることができる先生	4.34	0.85
G5	学校のきまりなどをきちんと守らせる先生	3.57	1.04
G6	魅力的な学級・学年・学校行事を計画することができる先生	4.08	1.04
G7	保護者と連携することができる先生	3.77	1.08
G8	教材や指導法の研究など自ら学ぶ意欲を持った先生	4.25	0.90
G9	子どもの日々の変化に気づくことができる先生	4.24	0.96
G10	礼儀正しい先生	4.21	0.96
G11	だれからでも学ぼうとする謙虚さをもつ先生	4.37	0.83
G12	子どもの人格を尊重する先生	4.58	0.71
G13	社会の変化にともなう教育課題に対応できる先生	4.40	0.80
G14	授業に全力で取り組む先生	4.33	0.93
G15	他の先生と積極的に意見交換をする先生	4.04	1.02
G16	だれに対しても笑顔で明るくかわる先生	4.43	0.84
G17	教育にかかわる信念を持っている先生	4.18	0.83
G18	子どもの成長に喜びを感じる先生	4.36	0.84
G19	地域と連絡することができる先生	3.57	1.12
G20	豊かな教養を備えた先生	4.20	0.85

理想の英語教師に必要な資質・能力（藤田）

表2 理想の英語教師に求められる資質・能力調査の結果

番号	項目内容	<i>M</i>	<i>SD</i>
Eng1	訳をきちんと教えてくれる	4.40	0.83
Eng2	生徒をひいきしない	4.58	0.75
Eng3	授業中前回の復習をしてくれる	4.08	0.94
Eng4	英語以外の知識が豊富である	4.09	0.92
Eng5	生徒に対して威張った態度をとらない	4.56	0.79
Eng6	単語や文法などの基礎を教えてくれる	4.45	0.85
Eng7	友だちのように参加したり接してくれる	4.17	1.05
Eng8	先生の実体験を話してくれる	4.18	1.00
Eng9	英会話ができるように教えてくれる	4.50	0.84
Eng10	世間話が面白い	4.09	1.02
Eng11	授業にペアやグループ活動を取り入れる	4.01	1.04
Eng12	授業の進度が速すぎない	4.42	0.86
Eng13	生徒をバカにしない	4.63	0.80
Eng14	授業は原則として英語で行う	3.61	1.01
Eng15	英語が不得意な生徒の気持ちが分かる	4.57	0.80
Eng16	文法中心の授業をしない	4.02	0.97
Eng17	英語がよくできる先生	4.23	0.91
Eng18	長文の内容を深めてくれる	4.26	0.86
Eng19	留学、海外研修などの経験がある	3.80	1.12
Eng20	宿題を出してくれる	3.21	0.99
Eng21	受験に関係なく教えてくれる	4.25	0.95
Eng22	生徒がわかるまで待ってくれる	4.22	0.92
Eng23	授業中必ず1回あててくれる	2.93	1.13
Eng24	厳しく指導する	2.72	1.13
Eng25	世界的な視野で物が考えられる	4.02	0.91
Eng26	文法を丁寧に教えてくれる	4.17	0.91
Eng27	発音が上手である	4.26	0.90
Eng28	ポイントを押さえて教えてくれる	4.55	0.72
Eng29	生徒が理解しているかどうか確認してくれる	4.39	0.75
Eng30	気軽に英語で話してくれる	4.07	0.85
Eng31	外国人のように英語が上手く話せる	3.77	1.01
Eng32	授業でゲームや歌をするなど工夫がある	3.88	1.11
Eng33	いろんな雑談をしてくれる	3.89	1.09
Eng34	4技能をバランスよく教えてくれる	4.35	0.83
Eng35	入試のことを考えて授業をする	3.87	1.05

次に、教師一般に求められる資質・能力調査の結果について探索的因子分析を行った。因子の抽出には、主因子法、回転方法にはプロマックス回転を用いた。なお、因子数の決定には、固有値1

以上をめどに、スクリープロットによる検証も合わせて3因子を仮定した。因子分析を繰り返した結果、表3に示すパターン行列と因子間相関が見られた。

表3 教師一般に求められる資質・能力の因子分析結果

	第1因子： 教育実践力 ($\alpha = .86$)	第2因子： 向上心・人間性 ($\alpha = .86$)	第3因子： 社会性・使命感 ($\alpha = .86$)	共通性
G1	0.75	0.02	-0.11	0.49
G6	0.71	-0.05	0.07	0.53
G4	0.70	-0.05	0.18	0.63
G3	0.66	0.20	-0.15	0.51
G2	0.64	-0.09	0.24	0.56
G18	0.40	0.13	0.30	0.55
G13	0.17	0.87	-0.22	0.74
G20	-0.13	0.72	0.07	0.47
G11	0.25	0.68	-0.07	0.66
G8	-0.13	0.56	0.26	0.45
G10	0.14	0.53	0.13	0.53
G9	-0.09	0.44	0.39	0.47
G19	-0.17	0.14	0.81	0.64
G7	0.05	0.04	0.75	0.67
G5	0.13	-0.22	0.71	0.45
G15	0.28	0.10	0.50	0.63
G14	0.02	0.24	0.50	0.47
因子間相関行列				
教育実践力	1.00			
向上心・人間性	0.67	1.00		
社会性・使命感	0.66	0.64	1.00	

第1因子は、「わかりやすい授業」「他の先生と協力」「子どもとのコミュニケーション」などの項目が収束したことから「教育実践力」と名付けた。第2因子は、「自ら学ぶ意欲」「礼儀正しい」「謙虚さを持つ」などの項目より「向上心・人間性」と命名した。第3因子は、「きまわりを守らせる」「保護者と連携」「地域と連携」「全力で取り組む」などから「社会性・使命感」と解釈した。また、各因子のアルファ係数も十分高く、信頼性も確認された。

理想の英語教師に求められる資質・能力についても同様に、主因子法、プロマックス回転の因子分析を行い、固有値1以上をめぐりに、スクリープロットによる検証も合わせて行い4因子を仮定した。因子分析を繰り返した結果、表4に示すパターン行列と因子間相関が見られた。第1因子は、「生徒をバカにしない」「友達のように接してくれる」「威張った態度をとらない」などの項目が収

束したことから、「カウンセリングマインド」と名付けた。第2因子は、「英語がうまく話せる」「留学などの経験」「授業は英語で」「世界的な視野」などの項目より「グローバルマインド」と命名した。第3因子は、「単語や文法の基礎」「ポイントを押さえる」「入試を考えて」などの項目から「基礎英語指導力」とした。第4因子は、「授業中必ず1回はあててくれる」「厳しく指導する」などから「厳しい指導力」と考えた。また、各因子のアルファ係数も十分高く、信頼性も確認された。

さらに、教師一般に求められる資質・能力、および、理想の英語教師に求められる資質・能力の各因子の因子得点を算出し、因子間の関係について相関分析を行った結果、表5の通りとなった。「教育実践力」、「向上心・人間性」は、英語教師としての「カウンセリングマインド」や「グローバルマインド」「基礎英語指導力」と強い相互作用（いずれにおいても $r > .60$, $p < .01$ ）があるこ

理想の英語教師に必要な資質・能力（藤田）

表4 理想の英語教師に求められる資質・能力の因子分析結果

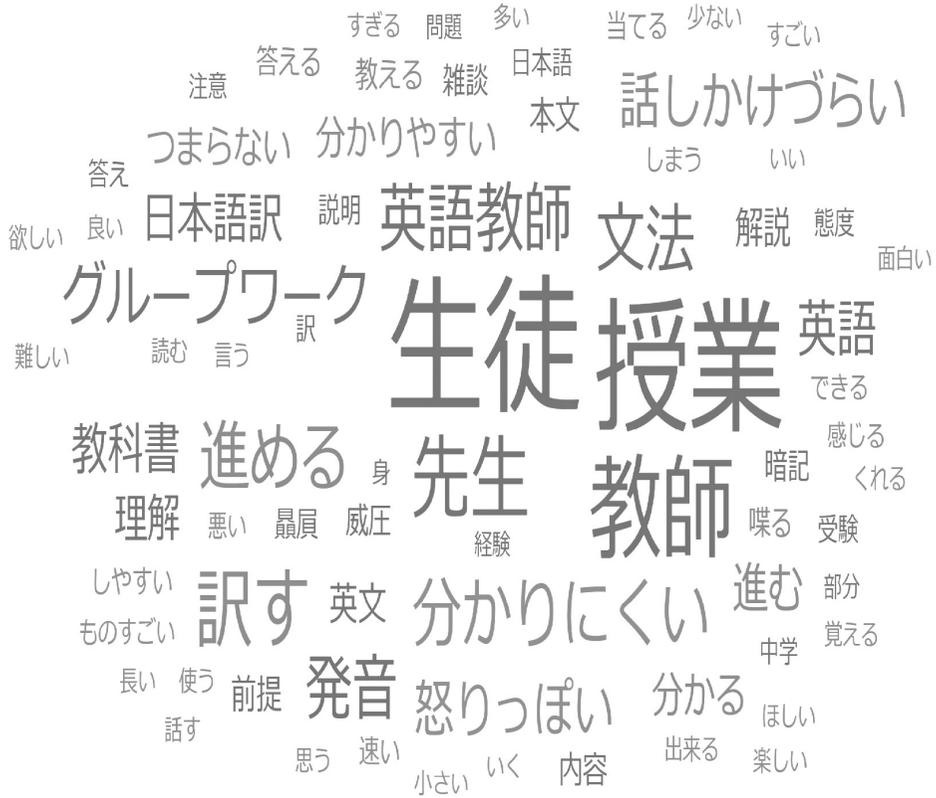
	第1因子： カウンセリングマインド ($\alpha = .91$)	第2因子： グローバルマインド ($\alpha = .88$)	第3因子： 基礎英語指導力 ($\alpha = .80$)	第4因子： 厳しい指導力 ($\alpha = .83$)	共通性
Eng13	0.91	0.00	-0.09	-0.01	0.72
Eng7	0.85	0.07	-0.20	-0.05	0.60
Eng5	0.82	-0.09	0.11	-0.10	0.68
Eng10	0.78	0.00	-0.04	0.02	0.57
Eng22	0.68	-0.17	0.19	0.15	0.57
Eng15	0.63	0.09	0.12	0.02	0.62
Eng8	0.59	0.22	-0.14	-0.03	0.44
Eng12	0.59	-0.07	0.21	0.04	0.50
Eng33	0.58	-0.03	0.20	0.10	0.54
Eng27	-0.16	0.90	0.03	-0.02	0.66
Eng31	0.01	0.70	-0.11	0.19	0.54
Eng19	0.04	0.62	-0.09	0.08	0.39
Eng14	-0.07	0.59	-0.04	0.27	0.44
Eng9	0.20	0.57	0.13	-0.30	0.59
Eng25	-0.02	0.56	0.14	0.07	0.44
Eng30	0.16	0.55	-0.01	0.16	0.52
Eng4	0.24	0.48	0.08	-0.10	0.48
Eng21	0.16	0.46	0.23	-0.05	0.53
Eng6	0.04	-0.08	0.78	0.09	0.61
Eng28	-0.09	0.25	0.72	-0.10	0.65
Eng1	0.11	0.10	0.63	-0.07	0.59
Eng35	0.01	-0.13	0.61	0.21	0.38
Eng24	-0.12	-0.05	0.16	0.82	0.67
Eng23	0.13	0.21	-0.14	0.73	0.70
Eng20	0.04	0.14	0.12	0.62	0.55
因子間相関行列					
カウンセリングマインド	1.00				
グローバルマインド	0.66	1.00			
基礎英語指導力	0.67	0.58	1.00		
厳しい指導力	0.22	0.32	0.20	1.00	

表5 教師一般に求められる資質・能力と理想の英語教師像の相関分析結果

	G1：教育実践力	G2：向上心・人間性	G3：社会性・使命感
E1：カウンセリングマインド	.74 **	.73 **	.61 **
E2：グローバルマインド	.64 **	.68 **	.55 **
E3：基礎英語指導力	.60 **	.66 **	.48 **
E4：厳しい指導力	.16	.22 *	.43 **

Note. $N = 107$, ** $p < .01$, * $p < .05$. (両側検定), 相関の強さを濃淡で表示

図2 「よくない英語教師」の特徴



ーダンス分析で「理解」を検索したところ「理解していない」「理解が追いついていない」という文脈であった。また、「分かる」は「分かりにくい」「分からない」という否定文で使われていた。「発音」については、「発音が悪い」「発音に癖がある」「発音だけを重視する」などの用法があった。

3.3 調査結果の考察

ここでは、調査結果に基づいて、研究課題について考察していく。英語専攻の大学生が教師に求める資質・能力としては、「教育実践力」「向上心・人間性」「社会性・使命感」の3因子があることが明らかになった。小柴ら（2014）による中高生の結果と比較すると、本調査では、「社会性・使命感」の因子が抽出されたのが特徴的であった。これは、本調査の参加者が大学生であったことから、より教師の社会的役割を重視するように

なったのではないかと思われた。理想の英語教師像としては、「カウンセリングマインド」「グローバルマインド」「基礎英語指導力」「厳しい指導力」の4因子が抽出された。これらは、保坂（2004a）の結果とおおむね一致していることが明らかになった。英語専攻の大学生にあっても、進学校の高校生と同様に、「厳しい指導力」が理想の英語教師像の因子となったが、3.50未満の評価の低い3項目が収束していた。これは、英語専攻の大学生の中には、厳しい指導で英語力を高めてくれる英語教師を求める学生は少なかったためではないかと推察された。

教師一般に求められる資質・能力と理想の英語教師像の関係については以下の点が明らかになった。すなわち、教師一般に求められる資質・能力のうち「教育実践力」「向上心・人間性」は、英語教師としての「カウンセリングマインド」や

「グローバルマインド」「基礎英語指導力」と強い相互作用が見られたのに対して、「厳しい指導力」は、教師一般に求められる「教育実践力」や「向上心・人間性」との関連が弱く、「社会性・使命感」との関係が強かった。厳しい指導力は、保坂(2004a)で指摘されたように、進学校の高校生などでは強く求められるが、英語専攻の大学生にはあまり強くは求められていなかった。したがって、社会性・使命感による厳しい指導は、理想の英語教師としての資質・能力と考えられるが、学習者によってその必要性や効果は異なるのではないかと思われた。

「よい英語教師」の自由記述からは、分かりやすい授業を工夫し、文法説明など難しい内容も学習者が取り組みやすく工夫することによって、授業を楽しめる時間とすることができるという特徴が明らかになった。結果として、学習者は、自分のために何かをして「くれる」という印象を持ったのではないかと考えられる。これに対して「よくない教師」は、学習者の理解を確認せずに授業を進めてしまったり、分かりやすい授業を工夫することができなかつたりするという特徴があることが明らかになった。授業内容では、ひたすら訳すことが多かつたり、発音が悪かつたり、発音だけを極度に強調しすぎたりする傾向があることが分かった。結果として、話しかけづらく、怒りっぽいという印象を学習者に与えてしまうのではないかと思われた。

まとめ

本稿では、英語専攻の日本人大学生が理想の英語教師に求める資質・能力について明らかにしてきた。その結果、理想の英語教師は、教師一般に求められる資質・能力と関連している「カウンセリングマインド」「グローバルマインド」「基礎英語指導力」を備えている一方で、「厳しい指導力」は、あまり求められていないことが判明した。自由記述の調査からは、学習者を前にして授業を分かりやすく工夫できるかどうかが基本的に大切だということが再認識できた。

今後の課題として、調査対象を英語専攻以外の

大学生に広げ、参加者の数と属性を拡大した大規模調査を行う必要がある。また、参加者の属性(たとえば、専攻、学年、性別など)による理想の英語教師像の違いについても調査していくことが重要となるだろう。本研究を発展させることによって、よりよい英語教育と英語教員の養成が行われることを期待して本稿を閉じる。

付記

本稿は2022年8月7日のJASELE 北海道研究大会、8月27日のJACET 第61回国際大会において行った研究発表を元に行っている。

参考文献

- 小柴孝子・武田明典・村瀬公胤(2014)「中・高生が求める理想の教師像—『教職実践演習』カリキュラム開発のために—」『神田外語大学紀要』第26号、489-569.
- 中央教育審議会(2006)「今後の教員養成・免許制度の在り方について(答申)」(2006年7月) https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1336998.htm
- 中央教育審議会(2012)「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上の方策について(答申)」(2012年8月) https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325092.htm
- 中央教育審議会(2015)「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について—学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて—(答申)」(2015年12月) https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1365665.htm
- 中央教育審議会(2021)『『令和の日本型学校教育』の構築を目指して：全ての子供たちの可能性を引き出す個別最適な学びと協働的な学びの実現(答申)』 https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/079/sonota/1412985_00002.htm
- 二宮克美・山本ちか・杉山佳菜子(2018)「印象に残る教師像—大学生への半構造化面接を通して—」『愛知学院大学教職支援センター年報』第1号、3-15.
- 藤田賢(2022)「英語専攻の日本人大学生にとっての理想の英語教師像」『中部地区英語教育学会紀要』51号、9-16.
- 保坂芳男(2004a)「理想的な英語教師像に関する実証的研究—普通科高校における生徒へのアンケートをもとにして—」『日本教科教育学会誌』第26巻第4号、9-18. https://doi.org/10.18993/jcrd-ajp.26.4_9

- 保坂芳男（2004b）「理想的な英語教師像に関する実証的研究(2)―PM理論を用いての生徒の学力差による構造比較―」『広島大学大学院教育研究科紀要』第二部，第53号，181-186.
- 牧野真貴（2015）「英語リメディアル教育を必要とする大学生が考える理想の英語教師」『リメディアル教育研究』第10巻第1号，62-70. https://doi.org/10.18950/jade.10.1_62
- 文部科学省（2019）「GIGA スクール構想の実現パッケージ」https://www.mext.go.jp/content/20200219-mxt_jogai02-000003278_401.pdf
- 山根文男・古市裕一・木多功彦（2010）「理想の教師像についての調査研究(1)―大学生の考える理想の教師像―」『岡山大学教育実践総合センター紀要』第10巻，63-70.